

平成 30 年 6 月 11 日現在

機関番号：33303

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K11535

研究課題名(和文) 看護教員が授業研究について体系的に学ぶためのプログラムの開発

研究課題名(英文) Development of a program for nursing teachers to learn about lesson study

研究代表者

池内 里美 (IKEUCHI, Satomi)

金沢医科大学・看護学部・講師

研究者番号：30727475

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：我々は看護教員の授業力量を高める術として、「看護教員が授業研究について学ぶための学習プログラム」(プログラムと略す)を開発した。プログラムは先駆的に授業研究を行っている看護師養成校の教員へのインタビュー調査等の知見を基に、講義「授業研究の意義」と演習「模擬授業研究」で構成した。プログラムの評価を検証するため、プログラ受講者89名の受講前後のアンケート調査を分析した。結果、授業研究の理解度は有意($p < 0.01$)に上昇していたが、授業研究への意欲では、授業研究の経験者が未経験よりも有意($p < 0.05$)に高い傾向が見られ、授業研究未経験者に対する内容の充実など、プログラムの改善点が示唆された。

研究成果の概要(英文)：Development of a program for nursing teachers to learn about lesson study. We developed a "learning program for nursing teachers to learn about lesson study" (abbreviated as a program) as a technique to raise the class competence of nursing teachers. The program consisted of a lecture "Significance of class research" and an exercise "simulated lesson research" based on knowledge such as an interview survey of teachers of nursing school teachers pioneering studying lectures. In order to verify the evaluation of the program, 89 questionnaires before and after attending the program were analyzed. As a result, the degree of comprehension of the lesson study increased significant ($p < 0.01$), but with the motivation to study lessons, experienced teaching studies tended to be substantially higher than inexperienced ($p < 0.05$). Improvement of the program such as improvement of content for inexperienced teacher studies was suggested.

研究分野：医歯薬学

キーワード：看護教員 授業研究 学習プログラム

1. 研究開始当初の背景

(1)看護基礎教育のより一層の充実が求められる今日、看護教員の質の向上を目的とした看護教員の継続教育の必要性とその検討が課題となっている。今後の看護教員のあり方に関する検討会では、大学や看護師養成所等関係機関のネットワーク作りや、教員相互の授業参観による教育実践能力の向上などの能力開発に取り組むことの必要性等が示唆されている(厚生労働省医政局看護課,2010)。しかし、その具体的な内容や効果的なプログラムについては明らかにされていない。昨今、看護教員の教育実践能力を高める手段として、授業研究が効果的であることは、授業研究の実践校における成果報告をはじめ、目黒(2009)や川口(2014)らによって論じられている。しかし、その一方で、看護教員が授業研究について学ぶ機会や有能な指導者の少なさから、研究方法自体を集中的に学ぶ必要性が指摘されている(新保,2014)。そこで看護教員の継続教育の中では、看護教員としての能力が最も問われる授業づくりに関する力量形成を高める術として、『看護教員が授業研究について体系的に学ぶためのプログラム』(以下、プログラムと略す)の開発が喫緊の課題であると考えた。

(2) 授業研究とは、授業設計(Plan)、授業実施(Do)、授業評価(Check)、授業改善(Action)という一連のサイクルに基づいて、授業を改善し、授業を創造することをねらいとする吉崎の定義(2017)に加え、教員が同僚・研究者等と共同体と実践する営みとする。授業力量とは、授業に関する信念、授業についての知識、授業技術に大別される(吉崎,1997)。

2. 研究の目的

本研究では、プログラムの開発にあたり、授業研究が看護教員にどのような変容をもたらすのか、またそれを促進する要因は何かを明らかにし(研究1)、さらに看護教員が自校で継続的に授業研究に取り組むために必要とされる企画運営上の工夫を明らかにした(研究2)。またわが国の看護教育は、米国の影響を受けながら確立している背景があることから、米国の教員における授業力向上に向けての取り組みを明らかにした(研究3)。プログラムは、研究1・2・3および先行研究によって得られた知見を基に作成し、そのプログラムの効果と課題を明らかにした(研究4)。

3. 研究の方法

<研究1>

(1)研究協力者：研究協力者は、授業研究に継続的に取り組んでいる3校の看護教員9名である。各校の管理職に研究承諾を得たのち、それぞれ教員経験5年未満1名(以下 若手とする)、5年以上10年未満1名(以下 中堅とする)、10年以上1名(以下 ベテラ

ンとする)を選出してもらった。選出された看護教員には、個別で研究参加の依頼をし、承諾の得られた9名の看護教員を研究協力者とした。

(2)データ産出期間：2015年8月～11月の期間にデータ産出を行った。

(3)データ算出方法：データ産出には、授業研究を始めた経緯、授業研究の経験を通して感じたことや得られたことに関して半構造化インタビューを実施した。インタビューは、研究参加者が勤務する看護師養成機関の個室で1人1回、約1時間、インタビューは1名または2名で行った。インタビューは研究参加者の許可を得てICレコーダーに録音した。

(4)データ分析：インタビュー内容から逐語録を作成し、授業研究の経験によって生じたポジティブやネガティブな感情、授業力量および授業研究に関する専門的力量とその要因に関する語りを文脈ごとに抽出した。カテゴリーを帰納的に定めて分類し、カテゴリーごとに、その出現頻度を若手教員間、1校の若手・中堅・ベテラン教員間、若手・中堅・ベテラン教員間で比較した(語りの総件数が9名で異なるため)。また、要因についても同様の手続きにより、個人、学校、国・社会というカテゴリーを設定し、比較検討した。逐語録から、授業研究中および授業研究後における授業研究に対する素朴な感情(以下 感情 とする)、専門的力量の変容(以下 変容 とする)、およびその要因(以下 要因 とする)についての語りを抽出後、カテゴリー分析を施し、教員経験年数の違いに着目してカテゴリーの出現頻度を確認した。

(5)倫理的配慮：本研究は研究者所属の研究倫理審査会の承認を受け、匿名性の確保等の倫理的配慮を行い実施した(処理番号15-02)。

<研究2>

(1)研究協力者：授業研究を継続的に実施している3校の企画運営に係る教員4名。

(2)データ産出期間：2015年8月～11の月期間にデータ産出を行った。

(3)データ算出方法：データ産出には、授業研究の経緯や企画運営に関して半構造化インタビューを実施した。インタビューは、研究参加者が勤務する看護師養成機関の個室で1人1回、約1時間、インタビューは1名または2名で行った。インタビューは研究参加者の許可を得てICレコーダーに録音した。

(4)データ分析：インタビュー内容から逐語録を作成し、上記の工夫に関して意味内容の共通性でまとめ、抽象度を上げサブカテゴリー、カテゴリーを抽出した。

(5)本研究は研究者所属の研究倫理審査会の承認を受け、匿名性の確保等の倫理的配慮を行い実施した(処理番号15-02)。

<研究3>

(1)研究協力者：米国のテキサス州およびロサンゼルス看護師養成機関で勤務する看護教員7名。

(2)データ産出期間：2015年8月から9月にデータ産出を行った。

(3)データ算出方法：データ産出には、授業力量を高めるための教員研修やその他の取り組みに関して半構造化インタビューを実施した。インタビューは、研究参加者が勤務する看護師養成機関の個室またはテレビ電話にて1人1回、約30分程度、インタビューは2名と通訳者(看護教員)の3名で行った。インタビューは研究参加者の許可を得てICレコーダーに録音した。

(4)データ分析：インタビュー内容から逐語録を作成し、意味のあるまとまりごとにコード化し、意味内容の類似性差異性に基づいてサブカテゴリー、カテゴリーを抽出した。

(5)本研究は研究者所属の研究倫理審査会の承認を受け、匿名性の確保等の倫理的配慮を行い実施した(処理番号15-02)。

<研究4>

(1)研究参加者：2017年3月~2018年2月、全国学会および近畿・北陸地方の看護師養成機関を対象に郵送にてプログラムの受講者(看護教員)を募集した。プログラムは、講義「授業研究の意義」と演習「模擬授業研究」で構成し、90分、3時間、5時間の3つのコースを設定した。模擬授業研究は、インタビュー分析の結果より、授業者と参観者が相互交流を効果的に図れるよう授業VTRを視聴後に協議会を体験してもらうこととした。

(2)データ収集：プログラム受講前及び受講直後に参加者の属性、授業研究への意欲、プログラムの評価に関する項目(5件法)及びプログラムの成果や改善点の自由記述アンケート調査を実施した。(3)分析方法：単純集計および属性ごとのクロス集計分析、コースごとの順位検定、記述データは内容分析・類似性に基づくカテゴリ化を施した。(4)倫理的配慮：本研究は研究者所属の研究倫理審査会の承認を受け、匿名性の確保等の倫理的配慮を行い実施した。

4. 研究成果

<研究1>

(1)変容の若手教員間比較(表1)

変容に関する語りは一人あたり18件~37件あり、感情に関するものが33.3%~54.0%と多くを占めていた。その内容は、ねがいや期待感といったポジティブな感情がある一方で、同時に負担感や困難感といったネガティブな感情が語られていた。また、専門的力量では、3名すべての教員に共通して、授業(信念・知識・技術)の知識に関する変容が多く語られていた。変容の語りの一例は、表2のとおりである。

表1. 変容の若手教員間比較

項目	A教員		B教員		C教員			
	件数	割合	件数	割合	件数	割合		
感情	授業研究中							
	ポジティブ	7	25.9%	9	24.3%	1	5.6%	
	ネガティブ	4	14.8%	8	21.6%	5	27.8%	
	計	11	39.3%	17	45.9%	6	33.3%	
変容	専門的力量	信念	1	3.7%	2	5.4%	5	27.8%
		知識	5	18.5%	6	16.2%	4	22.2%
		技術	0	0.0%	6	16.2%	2	11.1%
		授業研究						
		信念	5	18.5%	3	8.1%	1	5.6%
		知識	2	7.4%	0	0.0%	0	0.0%
	技術	1	3.7%	0	0.0%	0	0.0%	
	計	14	51.8%	17	45.9%	12	66.7%	
	合計	27	100%	37	100%	18	100%	

割合は、各教員の総件数に占める当該カテゴリーの件数

変容の各上位に含まれるもの

表2. 変容の語りの一例

感情	授業研究	感情		
		ポジティブ	ネガティブ	
感情	授業研究中	「授業の助言」をたくさんいただいたのはとても刺激的でした	私もやってみたくて思った	
	ネガティブ	やっぱり負担感っていうんですか、はやっぱり大きいです	先生たちに見られるプレッシャー	
感情	授業研究後	終わってみるとも楽しくてっていうような記憶があります	やっぱり考えてやって、がんばって良かったなあみたいな	
	ネガティブ	正直つらいな一みみたいなのはありました		
変容	信念	私が思ってるところよりすごく、もっとも学生の目線で考えているんだなあということがわかった	やっぱり一方通行じゃなくて、双方向に学びあっているようになっていったところで工夫して	
		やっぱり昨年度の課題がすごく明確に見えてきた	あっそうかここはもうちょっと押さえとかなきゃいけないんだとか、そこは少しわかってきたようにはなった	
	知識	こうやって学生を巻き込んでいくのかとか、ほんとに先を、授業の先を見越して今これを書かせてるんだ、学生に、グループワークさせてるんだとか、そういうことがわかって	グループワークとかちょっと取り入れるの怖かったんですけど、そのときにはやっぱり学生が言ってくれちゃうことを、あっそうだよなっていう感じでやれて	
		「私はこんなふうにはやってみようけど、こういうふうな視点でもしたほうがいいんじゃないかなってすごく思いました」とかあっていう、ちょっと共有する場になった。	何かいろんな教育観が聞けるのがまた新鮮でも面白いなって思っています。	
	授業研究	知識	毎回、今年度もおんなじようにならなくて(毎回、何か授業案は触ってます)途中省略)個々の教員だけでやっちゃうと根のつながりがなくなったりとか。	
		技術	毎回、今年度もおんなじようにならなくて(毎回、何か授業案は触ってます)途中省略)個々の教員だけでやっちゃうと根のつながりがなくなったりとか。	

(2)要因の若手教員比較(表3)

要因に関する語りは一人あたり19件~42件であり、これまでの教育場面における体験や授業研究の経験等の個人的要因が、52.4%と最も多い教員もいたが、3名の教員に共通して、授業研究の企画運営(授業研究の進め方、年間計画)、体制(教員の年齢構成、組織、業務分担)、文化(学校の特徴、教員同士の交流、協働性や同僚性)といった学校の要因が、47.6%~63.1%を占めていた。変容の語りの一例は、表4のとおりである。

表3. 変容の若手教員間比較

項目	A教員		B教員		C教員			
	件数	割合	件数	割合	件数	割合		
要因	個人	属性	4	14.3%	2	4.8%	2	10.5%
		価値観	4	14.3%	4	9.5%	2	10.5%
		経験	3	10.7%	16	38.1%	2	10.5%
		計	11	39.3%	22	52.4%	6	31.5%
	学校	企画運営	6	21.4%	11	26.2%	10	52.6%
		体制	4	14.3%	8	19.0%	0	0.0%
		文化	7	25.0%	1	2.4%	2	10.5%
		計	17	60.7%	20	47.6%	12	63.1%
	国・社会	制度	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
		社会情勢	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
		学外研修	0	0.0%	0	0.0%	1	5.3%
		計	0	0.0%	0	0.0%	1	5.3%
	合計	28	100%	42	100%	19	100%	

割合は、各教員の総件数に占める当該カテゴリーの件数

要因の各上位に含まれるもの

表4. 要因の語りの一例

個人	属性 (臨床経験年数・教員経験年数)	ただ私は経験年数もそういう状況(2年目)だったので、(途中省略)先輩の方だったりとか同僚の方からたくさんご意見をいただいたりっていう中で授業方法を検討して
	価値観 (性格・看護観・教育観・その時やっている授業改善の工夫)	学生たちがどんな意見を言ってもいいような雰囲気作りを、その(授業の)8回目までに大切にできた過程があった
	経験 (臨床経験・教育経験・これまでの教育場面における体験)	学生はやっぱり優しいので、まあまあ新しい先生やしこころ辺ぐらいいまでしらす？ぐらいで見てくれるのか、何か肯定的にいつも意見を返してくれるんで
学校	授業研究の企画運営 (授業研究の進め方・授業研究の年間計画)	協議会のほうではその内容から、まずは一つ協同学習を取り入れたっていうプロセスがどうだったのか、事前学習は適切だったのかっていう視点で先生方から意見をいただく機会にした
	体制 (教員の経験年数構成・組織・業務分担・学校の課題)	あんまり学科ですごく離れた授業内容にはしたくないという思いがあったので、他学科でおんじ講義をしている先生は(公開授業に)入ってくださって。
	文化 (学校の特徴・教員同士の交流・協働性や同僚性)	こんなこともしたいんです、あんなこともしたいんですっていうのを、いつも受け止めていただいていた
国・社会	制度	アクティブラーニングとか言われていますよね
	社会情勢	

(3) 一校における若手・中堅・ベテラン教員間の比較

各教員の語りの件数は表5のとおりである。教員間比較では、<若手>は感情が48.1%、専門的力量が51.8%とほぼ同数であるのに比して、<中堅><ベテラン>は感情が19.5%~28.6%、専門的力量が71.4%~80.4%と専門的力量に関する語りを多く認め、特に授業研究の信念が多くみられていた。感情では、授業研究に関する語りが多く、その内訳では「しんどいなって思う」「ちょっと大変」等、ネガティブなものよりも「とても刺激的」や「とにかく楽しくて」等、ポジティブな語りが多かった。

表5. 一校における変容の若手・中堅・ベテラン教員間比較

項目		若手		中堅		ベテラン		
		件数	割合	件数	割合	件数	割合	
感情	授業研究中	ポジティブ	7	25.9%	5	23.8%	4	8.7%
		ネガティブ	4	14.8%	0	0.0%	2	4.3%
	授業研究後	ポジティブ	2	7.4%	1	4.8%	3	6.5%
		ネガティブ	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
	計	13	48.1%	6	28.6%	9	19.5%	
変容	専門的力量	信念	1	3.7%	2	9.5%	7	15.2%
		知識	5	18.5%	4	19.0%	9	19.6%
		技術	0	0.0%	1	4.8%	2	4.3%
	授業研究	信念	5	18.5%	7	33.3%	12	26.1%
		知識	2	7.4%	1	4.8%	4	8.7%
		技術	1	3.7%	0	0.0%	3	6.5%
		計	14	51.8%	15	71.4%	37	80.4%
	合計	27	100%	21	100%	46	100%	

割合は、各教員の総件数に占める当該カテゴリーの件数

変容の各上位に含まれるもの

(4) 3校および経験別による変容と要因の割合比較

3校の学校間比較および若手・中堅・ベテランの3群比較について、ノンパラメトリック検定を行ったが、いずれも有意差は認められなかった。そのため、若手と中堅・ベテランの2群について Mann-Whitney の U 検定を実施した。その結果若手教員は、中堅・ベテラン教員よりも授業研究中のネガティブな感情が、有意(p<0.05)に多い傾向が見られ

た。また中堅・ベテラン教員は、若手教員よりも授業研究に関する信念が、有意(p<0.05)に多い傾向が見られた。

<研究2>

授業研究の企画運営上の工夫に関する161の文脈より、28サブカテゴリーと7カテゴリーを抽出した。以下カテゴリーは「」, サブカテゴリーは<>で示す。「年間計画の策定」<学校としての年間計画策定><教員個々の年間計画策定><教員負担の調整><予算の確保と有効利用><新人教育のための場面設定><学外への成果発表の継続><外部講師との調整>、「リーダーシップの発揮」<学校の独自性の追及><牽引者としての覚悟><授業を参観し合える学校文化の醸成><看護・教育に関する信念の徹底><次世代を担うリーダーの育成>、「研究授業後の協議会におけるファシリテート」<授業に関する肯定的理解の促進><参加者の交流の促進><教員背景を活かした協議の進行><意見の相違の整理>、「教育目的に応じたテーマ設定」<前年度の課題への対応><社会的ニーズへの対応><領域横断・統合可能性の検討><日常的な悩みや関心の考慮>、「多様な公開授業の設定」<リアルな体験を追及した教材の作成><異なる領域間の学びの導入><キャリア形成の機能の尊重>、「成果の確認」<学生目線での評価><学生への還元><後輩指導への応用>、「スーパーバイザーや外部組織の活用」<教育専門家による学びと意欲の喚起><他校や実習施設との交流機会の設定>であった。授業研究の継続には、研究授業後の協議会のファシリテートや組織的な授業研究テーマの設定等、授業研究の成果を確認しさらなる意欲を喚起できる機会を含む年間計画の策定、そのためのリーダーシップが必須であることが示唆された。

<研究3>

米国の教員の授業力向上に向けた取り組みに関する98の文脈より、17サブカテゴリーと4カテゴリーを抽出した。以下カテゴリーは「」, サブカテゴリーは<>で示す。「教員としての自立支援」<新人教員の不安軽減と自信獲得への支援><教員として継続できるための支援><教員の負担を考慮した段階的指導の工夫><メンターを支える学校の支援体制と課題>、「人間関係形成を土台とする」<教員である前に一人の人間として関わる><メンターとメンティーの関係性を考慮した継続支援><教員としてのモチベーションを喚起するかかわり><学生との信頼関係を大切にされた教員としての役割理解促進><教員同士の交流を軸とした自発的な授業参観>、「教員と学生の力を育む」<学生のアクティブを引き出すための授業方略><授業のねがいの明確に向けた支援><学生の学習目標を実現するための授

業技術の伝承><授業技術を高めるシュミレーション指導研修><授業評価改善のための取り組み>、「地域・社会情勢への意識」<教育ニーズに対応した校内研修の企画><地域の繋がりを意識した他校との連携><国家施策としての卒業後継続教育>であった。アメリカの看護教員は、授業研究という概念ではないものの、互いの授業を参観し、リフレクションしながら授業力を高めていることが分かった。また、新人教員の支援としてメンター制度による教員としての自立支援に力を注いでいた。

<研究4>

プログラムは5回実施され、参加者は延べ102名、回答者は93名(回収率91.0%)、有効回答数89名(有効回答率95.0%)であった。コース別受講者数は、90分が20名、3時間が58名、5時間が11名であり、授業研究の経験者は30名、教育経験年数5年以上は61名であった。受講前後の授業研究の理解度は、全体および各コースにおいて有意($p < 0.01$)に上昇していた。プログラム全体、講義、演習の評価では、いずれも「とても良かった・良かった」が86名(96.6%)以上であった。授業研究への意欲では「所属校で授業研究を取り入れたい・やれそうだ」が63名(70.8%)であるが、授業研究の経験者が有意($p < 0.05$)に高い傾向が見られた。自由記述の内容として代表的なものは、プログラムの成果は「自己の授業改善の機会」「授業研究に対する理解の促進」であり、改善点は「教員のレジデンスを考慮したグループ編成」「ディスカッションの時間の確保」であった。

【考察】全コースにおいてプログラムが受講者の授業研究への理解を高めるものとなっていた。改善点を踏まえたプログラムのさらなる充実と授業研究未経験者の実践に繋がる内容の検討が示唆された。

<引用文献>

- 今後の看護教員のあり方に関する検討会
報書。(厚生労働省医政局看護課,
2010).[http://www.mhlw.go.jp/shingi/
2010/02/dl/s0217-7b.pdf](http://www.mhlw.go.jp/shingi/2010/02/dl/s0217-7b.pdf)
- 川口孝泰:看護教育の初めの一步は自分の
授業研究から,特集授業研究のすすめ,
看護教育,vol.55,6-10,2014
- 木原俊行(2008):授業研究と教師の成長,
日本文教出版株式会社
- 木原俊行(2010):校内研修推進リーダーの
ためのポートフォリオ,大阪教育大学・
大阪市教育センター
- 目黒悟:看護教育を磨く授業リフレクシ
ョン教える人の学びと成長,メヂカルフレ
ンド社,2-139,2010.
- 新保幸洋:授業研究が教員にもたらすもの,
特集授業研究のすすめ,看護教育,
vol.55,16-23,2014
- 吉崎静夫(1997),デザイナーとしての教師,

アクターとしての教師,金子書房,
吉崎静夫,蔵谷範子,末永弥生(2017):授業
が変わる!学びが深まる!看護教員
のための授業研究,医学書院.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

[雑誌論文](計0件)

[学会発表](計4件)

池内里美,合田友美,木原俊行:看護教員が
授業研究について学ぶためのプログラ
ムの評価 参加者の学びの分析,日本
看護学教育学会第28回学術集会,2018
年

池内里美,合田友美,木原俊行:看護教育に
おいて授業研究を継続するための企画
運営上の工夫,日本看護学教育学会第27
回学術集会,2017年

池内里美,合田友美,木原俊行:授業研究を
通じた看護教員の変容とその要因に関
する経験年数比較,日本看護学教育学会
第26回学術集会,2016年

合田友美,池内里美,木原俊行:授業研究に
よる若手看護教員の変容とその要因の
実態把握,日本看護学教育学会第26回学
術集会,2016年

6. 研究組織

(1)研究代表者

池内 里美(IKEUCHI, Satomi)
金沢医科大学・看護学部・講師
研究者番号:30727475

(2)研究分担者

合田 友美(GOUDA, Tomomi)
宝塚大学・看護学部・准教授
研究者番号:20342298

木原 俊行(KIHARA, Toshiyuki)

大阪教育大学, 連合教職実践研究科, 教授
研究者番号:40231287

(3)連携研究者:なし

(4)研究協力者

西田 好江(NISHIDA, Yoshie)
生野 恭子(IKUNO, Kyouko)